

Title	<図書紹介>ミッシェル・ブラック著アヴリル・ブレイク 編中山修一訳『デザイン論—ミッシェル・ブラックの世界』法政大学出版局1992, 255P
Author(s)	日野, 永一
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 101-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53208
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ミッシェル・ブラック著 アヴリル・ブレイク編 中山修一訳
『デザイン論—ミッシェル・ブラックの世界』
法政大学出版局 1992, 255P

機能主義からポスト・モダンへ。さらに混沌として明確な出口を見出せないでいる現在デザインの潮流の中であって、インダストリアル・デザイナー達はどの様な悩みを持ち、どの様な未来を描いているのであろうか。芸術と工学との双方に立脚点を持つインダストリアル・デザイン (ID) は、初期の目的のように確かに一つのビジネスとして不動の地位を確立したが、「IDの青年期はもはや終わった」現在、一つの転機を迎えているのは事実であろう。

著者のミッシェル・ブラックの名は、IDデザイナーならば耳にしたことがある。戦後のイギリスを代表するモダニスト・デザイナーの一人であり、国際インダストリアル・デザイン団体協議会の会長、王立美術大学の教授といった要職を務め、1977年に亡くなった。本書は彼の講演・執筆の中から15編を選んだデザイン論集である。

学者や評論家ではない彼の論は、必ずしも明快な結論を示していない。企業に対してデザインの必要性を呼びかける論の中では、デザインによって販売が促進された例をあげ、さらにデザイナーとしての必要条件に大衆の趣味の動向への理解をあげながら、一方で大衆の趣味に迎合する姿勢を批判する。またIDが「芸術」と何らかの関係を持っているとは思えないとしながらもIDデザイナーの教育における美術的側面の重要性を主張し、ものが描けないデザイナーを否定する。工学との関係についても

同様である。

こうした一見矛盾する論の展開は、明快な結論を望む読者にとっては不満が残るだろうが、むしろデザインの実務に当たる者の共通な悩みを率直に表したものと受け取ることが出来るのではなかろうか。ただその中であって自己の立場として譲ることの出来ない一線があるわけで、「安易な順応よりも信念と情熱の方が大事であり、量よりも質のほうが望まし」い事を確信し、また「専門家としての生命をかけて正義のためにりっぱな仕事を成し遂げようとする英国人の気質をもたず、自分たちの「存在証明」は依頼主の商品が売れることであると無愛想に言ってはばからない多くのアメリカのインダストリアル・デザイナー」に対する批判ともなって表れるのであろう。

意見も中庸で常識的、刺激的なところが少ないのも英国的と言えなくもない。いわば青年期を過ぎた大人の落ちついた口調で語るモノローグといった印象である。だが日本ではまだ上のような悪い意味でのアメリカ的IDデザイナーも少なくないことを考えると、日本のデザイナーにも是非読んでもらいたい気がする。

なお翻訳は、既に何冊もの英国のデザインに関する翻訳を手掛けている意匠学会会員の中山修一氏の手になるが、ややこしい英国流の言い回しも読みやすいものとなっている。

日野永一 兵庫教育大学